

いこいの村

加藤 正典

題字 栗の木寮

2010年（平成22年）2月20日発行

第333号

発行責任者 いこいの村聴覚言語障害センター

所長 柴田 浩志

編集 いこいの村編集委員会

〒629-1242

綾部市十倉名畑町久瀬谷2番地

TEL (0773) 46-0101

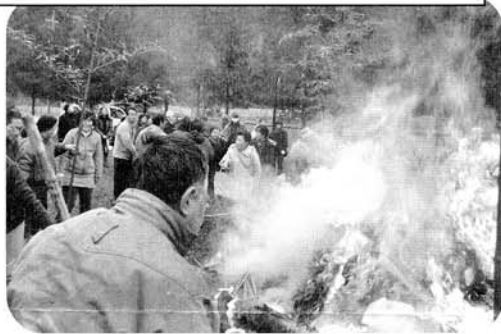
FAX (0773) 46-0610

<http://www.kyoto-chogen.or.jp/ikoi>

2010年を幸せな年に！ 『どんとまつり』開催



今年もみんなで、幸せになろう



目標達成したぞ～！

総売り上げは

8,429,688 円！



一月十二日、しめなわの総まとめとして、『どんとまつり』を開催しました。京都生協組合員の皆さんや地域の共同生産者の皆さんと一緒に、約百名で、どんと焼き、年末の販売や売り上げの報告会、もちつきでの交流を楽しみました。

目標額の七五〇万円を達成した報告会。仲間たちの自信に満ちた喜びの笑顔に、気持ちのいいスタートができたことを実感しました。皆様のご協力に支えられ、今日があります。販売で聞かせていただいた数々のご意見を胸に刻み、今年も頑張っていきます。

（栗の木寮 滝野千里 畑省次）



『認知症』を

知ってください



「その人らしさ」を支えるために」

二〇一一年(平成二十三年)年「認知症対応型グループホーム」開設に向けて、職員が「認知症」についての学びを深めるために研修等に参加しています。

二通りの「物忘れ」

高齢になって、物忘れが目立ったり、思い出せないことがあると「認知症では？」と不安になってしまうことがあります。

物忘れには、「加齢による物忘れ」と、「認知症による物忘れ」の二通りが考えられます。「加齢による物忘れ」は、昼ごはんは何を食べたかな？とメニューを思い出せなかったり、置き忘れた物を探しまわっても後から思い出せたり。忘れたことが自覚できて

いるので、個人差はありますが日常生活には支障がないとされています。

一方、「ご飯を食べたこと自体を忘れたり、置いた場所が思い出せなくなったり。忘れたことの自覚ができなくなると、本人も、周りも、その変化に混乱してしまいます。その混乱を引き起こす物忘れが、「認知症によるもの」です。

「認知症」は誰にでも

起こりうる「病気」

「認知症」とは、脳のある部分の細胞が壊れてしまったら、働きが悪くなったためにさまざまな障害が起こり、自分らしい生活をおくることが困難になっていく状態です。今や誰にでも起こる「病気」で、要介護認定者の二人に一

人は発症しているといわれています。

「わかる力」が低下

↓混乱した行動

『財布(大事なもの)を置いた場所がわからない』
『思い出せずに探しまわる。』
『自分の家、部屋はどこ?』
『居場所がわからずにウロウロする。』
『トイレがわからない』
『我慢できずにもらしてしま

う。』



『一人でできていた事ができな』

↓自信がなくなり、引きこもってしまう。

「わかる力」が低下し、今まで、できていたことができなくなり、混乱して不安でいっぱいになってしまいます。そんな時、誰かが、そばで支えてくれると、本人にとって安心できるのではないのでしょうか。

行動・言葉の二つ二つに

意味がある

周囲から「おかしい」と思われるその行動は、本人にとっては精一杯で、「教えてほしい」「助けてほしい」という「悲鳴」なのです。

わからないことが多くなっても、昔からの経験や、知恵は失われずに残されていることが多いのです。その経験や知恵を使って『わかる』ことや『できる』ことにつなげていくことで、本人の不安を除くことができます。そのためには、本人のペースにあわせて、

① ゆっくり話を聞く
② 置き場所や、タンスに目印をしてわかりやすい工夫をする

③ 好みや、大切にしていたものを取り入れ、馴染みのある環境を作る

④ 繰り返し話される昔話を大事にする。そこに「その人らしさ」があり、話を聞いてもらうことが誇りにつながります。

家族だけで

抱え込まないで

「最近、おかしい」と気づけるのは、家族や身近におられる方々です。でも、「認知症」の方々の暮らしは一人では支えられません。

いまだ完全に治せる薬はありませんが、症状によっては、進行を遅らせたり、治せることもあります。専門医に早い時期に相談することも、症状を軽減できる第一歩です。

相談支援に携わっている私たちも、一緒に寄り添うお手伝いができればと思っています。気軽にご相談ください。



慣れ親しんだ仲間と作る楽しみ
デイサービスにてケーキ作り

(綾部東部在宅介護支援センター)
介護支援専門員 渡邊美幸)

健康の豆知識

耳のケアについて



三月三日は耳の日です。今回は耳の日にちなみ、普段何気なくしている耳のケアについてお話しします。

耳あかの話

耳あかは、外耳道(耳穴)の耳垢腺(じこうせん)というところから出る体液と古くなってはがれ落ちた皮膚や毛が混ざり合ってきたものです。

耳あかは、東洋人の場合は約四分の三の人がカサカサ(乾性)で、残りの四分の一の人がベトベト(湿性)と言われています。

耳あかの成分は、殺菌作用を持っており、他にも外耳道のデリケートな皮膚を保護してくれる役割も担っています。

耳のトラブル

いろいろな役割をもつ耳あかですが、放っておくと耳あ

かが耳栓をしているように耳穴を塞ぎ、難聴や外耳炎の原因になることがあります。

湿性タイプでは、耳掃除の際に自分で耳あかを奥のほうへ押し込みやすく、乾性タイプでは、プールや入浴などで耳あかが水分でふやけて炎症を起こすことがあります。また、放っておくと耳あかが硬くなり自分では取るのが難しくなることもあります。

耳掃除のやり方

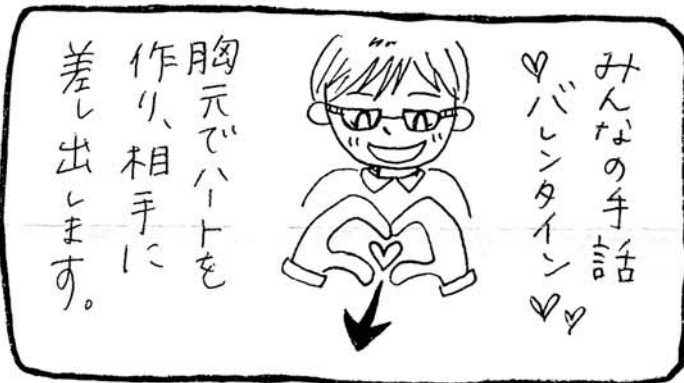
外耳の炎症は、耳のかきすぎやいじりすぎによるものがほとんどです。耳の皮膚はとてもデリケートなので、やさしく扱うのが基本です。細い綿棒が耳かきを使い、見える範囲のものだけを真ん中から外へ向かって拭くように取ります。気持ちがいいからと、つい奥深く入れてしまいがちですが、耳あかは耳の入口から約一センチあたりに溜まるので、そんなに奥まで入れる必要はありません。

あまり頻繁にしすぎると、また皮膚を傷つけ炎症を起こ

してしまつことがあるので、耳掃除は二〜三週間に一回ほどで十分です。耳あかが固くなりすぎて自分で取るのが難しいときは、決して無理をしないで耳鼻科を受診して取ってもらいましょう。

(舞鶴市聴覚言語障害者支援センター) 白杉 拓哉
いこいの村医療係

宮嶋 理絵



いこいの村
聴覚言語障害センター
所長 柴田 浩志

いこいの村から車で十五分ほどの中上林に、社会福祉法人中上林福祉会が運営されてきた、たから保育園がありました。当法人職員の中にも同園の卒園生がいます。同園は、児童数の減少により平成二十一年に廃園になりました。

この度、永く児童福祉に貢献されてきた、たから保育園の土地と建物を当法人に譲渡していただきました。一月十四日、いこいの村において中上林福祉会の西部文育理事長様から、当法人の高田英一理事長に建物の鍵が引き渡されました。高田理事長は、「長く地域の発展に貢献されてきた保育園。今後は聴覚障害者福祉を始め、地域の皆様のご要望も伺い、更に福祉の向上に尽くしたい」とお礼を述べました。いこいの村では今後、しめ縄の生産等に活用させていただきます。予定であることから

栗の木寮の仲間(利用者)が、西部理事長にお礼の品を贈りました。

しめ縄生産は、これまでいこいの村内の作業棟だけでは手狭なため、中上林の諏訪織維様の一角をお借りし、四年間生産を行ってまいりました。今後は園舎に生産拠点を移し、ボランティアの皆様とともに、しめ縄作りを進める計画です。また、地域の皆様のご要望も伺い、更に利用の拡充に努めたいと考えています。



昨年、京都府北部の難聴者運動に大きな貢献をされた濱本俊吉様が亡くなりました。彼は生前「難聴者は交流することで生きる意欲が湧いてくる」と述べておられました。人と人との交流は難聴者のみならず、全ての人にとって大切なことです。園舎の新たな活用が多くの人の交流の場となるよう願っています。

